
未来?過去!?

棟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来？過去！？

【Nコード】

N4953A

【作者名】

棟

【あらすじ】

平凡な日々をおくっていた【月島ちはる】と友人でどこかおかしい【桜井春】そんなある日一人の男が倒れているのを発見して関わっていたら次の日【春】が行方不明になる。【ちはる】は昨日の男が怪しいと考えているが…。実はこの男現代の人間ではなかった

第1話：謎？

4月26日：月曜日 朝

いつも通りの朝が始まった。別に学校は嫌いではない。友達だつていないわけではないし、勉強が苦手なわけでもない。ただなんの变化もなく過ぎていく日々が嫌いなのもかもしれない。

と、高校へ登校する時考えていた。

いきなり後ろから声が聞こえた。

『おい！！ちはる！！！！』

……なんて大きな声……。前を数人歩いていたが全員振り向いた。

『もう！恥ずかしいから大きい声で人の名前呼ばないでよ！』

私は必死に言った。

『ごめんごめん。アハハ』

……絶対反省はしてない。

こんな朝が毎日続いている。

だから嫌になるのかな？などとまた歩きながら考え込んでいた。隣では春が喋っていた。あ春は先ほどの大きな声で人の名前を呼んでいた子だ。桜井春という名前で、季節的には『春』をイメージさせる名前だが、私から見ると……『夏』しか思いつかばない。暑いしうるさいというのが私の『夏』のイメージ……。

『あれ？人が倒れてる』

春がそう言つて前を見ると本当に人が倒れてた。

『こういう時どうするんだっけ！？あつ人工呼吸？』と春が言う。

『いきなり！？』本当に驚いた。『とりあえず救急車！あつ意識があるか確かめてみよう』

『わかった！』春はそう言つて頬をおもいつき叩いた。

バチーン！バチーン！バコッ！

……3回もおもいつき叩いた。しがも最後はなぜかグーで頬というより目の横を殴っていた。

『いやあゝまいったねゝ、僕になんの恨みがあるかわかんないけどねゝいきなり殴られてもねゝ』

ここは学校近くの公園。先ほど倒れていた男性が腫れた右目を濡れたハンカチで押さえながら話してる。見た目は二十代前半って感じ。でも無精髭で寝惚け目そしてやる気なさそうな声！顔！

ボソツ（…なんか怪しい人）

『そこ！なんか言った？』

『いえ、別にハハハ…（地獄耳！）』ひきつった顔で喋っていることが自分でわかった。

『では失礼しまーす』走ってその場を離れた。

『ちよいちよいちよい！キミたち待ちなさい』後ろから追ってきた。

『うわっ！追い掛けてくる』

『うわっ！ってとことん失礼だね！』

どちらも全力で走っている。私達はなんとか学校まで入った時には男の姿はなかった。

『面白かったね！』やっぱり春はどこかずれたことを言っている。

『何言ってんの危ないよゝ。あーいった人が犯罪をおかすんだから！』

『アハハ気をつけるよゝ』

『…………。』

放課後

『今日は先に帰るからー』私は春にそう言うって教室を後にした。いつもは一緒に帰るけどたまに私は一人で帰ることがある。だから別に珍しいことではない。これもいつもと同じ光景である。

一人で帰るのは遠回りをして家に帰るからだ。ただ歩くのが好きだしいつもと違う景色も見たいからという特に深い理由はない。（今

日は人通りの少ない道を歩いて帰ろう。そう思い、いつもと違う道を選んだ。

ひよっとしたら違う道を通ればなにか起こるかもしれないとかすかに期待しながら歩いている。でも実際今まで変わったことは起きてない。まあそれが現実なんだろうなと思っていたら前方に倒れてる人を見つけた。……………とても嫌な予感がした。なんか見たことあるし…。とりあえず素通りをしようと思ったが、横を通った時、ムクツと起き上がった。

『ヒイツ！』

『ヒイツ！ってまた失礼な発言だね。ってかなんでキミは僕のいる所に現れるんだい？』

ボソツ（逆だよ）

『えっ？なに？』

『べつ別に（ってか反応するなら聞えてるんじゃないの？）』

『まあいいや。あれ？僕をボコボコにした子は？』キヨロキヨロしながら言った。

『（ボコボコって…）別に帰りは一緒じゃないから、まだ学校だよ』

『ふん、学校ね…』少し考えてから『学校ってどこ？』

『えっ？学校？……………このまま真っ直ぐ行っただけで突き当たりを右に行っただけで左に曲がって右に回って真っ直ぐ進めば学校だよ』
って適当なことを言った。

『む、なかなか複雑だね。ありがとう少女』と言って消えていった。

（やっぱり危ないな。明日、春にまた忠告しとこ…）と考えて帰宅した。

第2話：事件発生！

4月27日：火曜日 朝

今日もいつもと同じ朝 ではなかった。いつものうるさい声が聞こえない。学校についたけどついに春は来なかった。遅刻？今までそんなことはなかったけど……。まああの春だし別に心配はしないけど。

『実は桜井が昨日から行方不明だそうだ。そこで警察と協力して学校でも桜井を探すので今日は全員自宅で待機して下さい。また何か情報があれば学校にすぐ連絡して下さい。それと帰宅するさいくれぐれも気をつけて帰宅して下さい』
担任が言い終えると、クラスはざわついた。

帰宅中 今日はいつもと違った、春がない。

1日いなくなったからってそんなに心配することはない。
と自分に言い聞かせる。

しかし考える。

あつそういえば昨日の…。

私はあの男を思い出した。

適当な道を教えたが偶然途中で出会ったかもしれない。そもそもあの男はなんで春の居場所を聞いたんだろう。殴られた仕返！？。でもいくら春でも知らない人にはついていけないだろう。無理矢理連れて行こうとしても学校から春の家まで住宅が並んでいるから春がああ大声を出せば周りの人が気付くだろう。

……………知らない人にはついていけない…………。

知らない人？春にとってあの男は知らない人じゃない。

でも普通あんな出来事があったんだから警戒するし知らなくはないが完璧他人である。

しかし春は昔からそうだったことがある。

一度話せばもう知らない人ではないと言っていて、何度か誘拐されようとするのがあった。今まで大きな事件にはなっていないが、なにかあるたび私は注意するが反省したことはないと思う。今回も【知り合い】だから、ということであの男についていったのか？まさか。いくら春でも、もう高校生だし。……………でも。と考えていたら自宅に就いていた。

『あゝあ疲れた……春無事かな……』

『心配なら探しにいくか？』

『探すつてどこを？……………えっ？』

私の横にあの男が座っていた

『ええっ……！！！』

すごい驚いた。なんでこの男が私の部屋に？？どうやって家に入っただんだ？家は両親共働きで普段この時間帯、家は鍵をかけて誰もいないのにこの男は私の部屋に入っていた

『ゆ、誘拐犯！その上泥棒！？』

いやひよつとしたら私も証拠隠滅のため誘拐しに来たのかもしれない。。。『誘拐？なんの』

言い終る前にカバンやその辺にあるものを投げつけた。

『イタツちよつ 待つてイタツ』

ゴツ。鈍い音がした。私が投げた四角い時計の角が頭に直撃した。

『あつ』

私は投げる手を止めた。やりすぎたかも……でも相手は犯罪者今がチャンス家から出て警察に連絡しよう。部屋を出ようとした時

『あの少女の居場所知りたくないのか？』

男が言った

『うつ……』

私は迷った。警察に連絡すれば事件は解決すると思うが、私が家を出て連絡してる間にこの男が仲間に連絡して春を殺すかもしれない

…！考えすぎかもしれない。でもこの男の言うことを聞けば春に会えるかも…。

私は部屋を出るのを止めた。

『ふうーまた酷い目にあつたな〜』

男はおでこを押さえながら言った。

『春はどこなの？』

『どこなんでしょうね〜？』

人をおちよくるしゃべり方で返事をする。『なに言ってるの！私も誘拐するなら早く春の所に連れて行ってよ』

『誘拐？さつきも言ってたけど、僕は誰も誘拐してないよ』男は軽く言った

『嘘！だって昨日春の居場所聞いていたし！第一家に無断に入り込んで』

『彼女の場所を聞いたのはコレを返そうと思ってね〜』

そう言つてハンカチを出した。昨日腫れた目を冷やすために春が出したハンカチだ。

『昨日キミが言つた通りにいったら警察署についてね〜まいったよハッハッハ〜』

『うつ、じゃあなんで家にあがつてんのよ！』私は問掛けた。

『いや〜学校の場所もわかんないし、しょうがないから昨日寝てた場所から真っ直ぐキミの歩いていった道をいったらキミに似た女性がかギをポストに入れてどっかに出かけていったからそれを使つてね〜』

似た女性は母親だろう……。

『それでキミにこのハンカチをあの子に渡してもらおうと思つて』

『つてか不法侵入じゃん！』

『ちゃんと、お邪魔しますつて言つたよ』ちよつとキレぎみに言った。

ばっ馬鹿だコイツ…なんでちよつとキレてるの

『あつそれよりアンタは春の居場所知らないの？』

『知ってたらわざわざこんな所来ないよ』 いちいちムカつくことを言う。

『でもさっき、あの子の居場所を知りたくないのか？』って聞いたじゃん』

『いや、それでも言わないとキミ逃げそうだったから』

……とりあえず近くにあった枕を顔面に投げつけた。

第3話：道具！？

『とりあえずどこを探そう？』

私は家を出てから言った。

『うゝんそうだねゝ、とりあえずあの子の家に行ってみよう。次はちゃんとした道を教えてね』

いちいちうるさいやつだ。

『はいはい』

私は愛想なく答えた。

春の家に向かう途中いろいろ考えた。なんでこの男は一緒に春を探すのだ？ハンカチを渡すだけなら私に預ければいいのに。でも誘拐犯にしてはなにか違う気がするし、こんなことをする意味がない。ますます怪しい。第一、家に不法侵入したのは犯罪だし…。

『ここが春の家よ』

春の家についたが警察の人が外に数人いるし中にも家族と警察がいるようだ。

『つてか春の家に来てもなんの意味ないじゃん』

『いやゝ部屋に入ればいろいろとやりやすかったんだけどなゝ』

…また不法侵入をしようと考えていたのか……。

『これじゃあこの道具が使えないなゝ』

男はいつの間にか、四角い箱みたいなのを持っていた。今まで見たことのない物だった。パツと見てSF映画にできそうな未来的な物に見えた。しかしよく見ると一部古い物でつなぎあわせてる所があった。古臭い機械。所々、木の板も使っている。天辺には矢印みたいなのがついていた。

……なにこれ？まるで未来の道具と過去の道具が交ざったみたい。過去と未来？

『なによこれ？』

『えっ、えゝと説明してもどうせ信じないから実際に使ってみるよ。』

でもあの子の所持品なんて持つてないよね？」

なに言ってるの？ やっぱり危ないかも。

「あっ！ ハンカチ持つてたんだ！ これを使おう」

「（自問自答？…。）」

「でっ、それをどうするの？」

「この箱にハンカチを入れて」

そう言つて男は箱を開けて春のハンカチを入れた。

「それで次にこのスイッチを押します」

なんかインチキ手品師の口調になつてきた…。

「あっ、このスイッチを入れると僕は気絶するけど、この箱があの子の場所を教えてくれるから僕も一緒に連れてつてね」

…… やっぱりおかしい！ なに言ってるのか全然わからない！ 気絶する前に気絶するつて宣告する人なんて見たことない！ そもそもなんでこんな怪しい男と一緒に行動しないといけないんだ？ 逃げよう

「やっぱり別々に探した方が」

ポチッ

あっ押した。

バタッ

「えっ？」

押した瞬間、男が倒れた。 …… なんの冗談なんだろう。

「はあ〜」

私がため息をついて、ふと男の持つていた箱を見ると天辺の矢印が急に動きだし、北の方をさして止まった。 …… ？ よくわからない。なぜ急に動いてそして止まったのか。私はその箱を手に取り、確認をして、倒れた男をチラッと見て再び箱を見た。しょうがない、今はコレを信じるか。乗り気ではないがとりあえずその矢印の方向へ行くことにした。 …… でっこの人どうしよう。本当に気絶してんのかな？ 第一連れていくつたつてどうやって？ …… とりあえず家から自転車を持ってこよう…。

第4話：発覚

昼

私は家から持ってきた自転車の後に男を落ちないように縛り付けて、矢印が指す方へ向かった。其にしてもいつたいこの道具はなんなんだろう？左右の分かれ道があるとどちらかに矢印が傾く。本当に導かれてるように。うゝん謎だらけ。

『うゝん』

あつ後の男が起きたみたい。

『ねえ結局あなたは何者なの？それにこの道具どうみても今の時代の物じゃない気がするんだけど』

『ちよつと興味をもちはじめたねゝそろそろ信頼してくれたかな？』

『ボソツ（別に今の所信頼する要素はないけど…）興味はあるわ』

『まだ信頼されないかゝ』

… やっぱり地獄耳。

『まあどつちでもいいけど、僕の事は話とくね。名前は伊久垣いくがきけん犬太つて名前。伊久垣でいいよゝ。あつキミの名前は？』

そついえば名前を聞いてなかった事に気付く。

『…私は月島ちは 『わかった！月島ちはだね。うゝんじゃあ、ちはと呼ぼう』』

名前を言い終る前に勝手に理解して呼び名も勝手に決めた。今までトロトロしてたくせになんで今だけ早くなつたのだ？。

『名前違 『それで話を戻すけど』』

また遮られた。本当にム力つく！わざと？

『実は僕現代の人間じゃないんだゝ。』

なんか重大な事を言ってる気がするが、やる気のない口調で言われて重大な気がしなかった。でもこれが本当なら凄い事だ。私はこういうのを期待して日々過していたのだ。だから気持の準備は出来ていた。なのであまり驚かない。

『つてことはあなたは未来からきたの？』

すごい！もうドラ もんの世界じゃない！

『 いや過去から来たんだ〜』

..... えっ？過去？...。なんで過去なの？

『なに言ってるの！なんで未来からじゃなくて過去からの？？そもそもこんな道具過去には無いでしょ』

『いや〜分かりづらいよね〜僕もよくわからないんだ〜』

驚かないと思っていたがなんか違う意味で驚いた...。

『とりあえず最初から話すね』

伊久垣が話だした。

『今2006年だよな？話は600年後から始まるんだ。2606

年。その頃過去と未来にイける薬が開発されたんだ。この薬は年号が書いてあってその年号の薬を飲むとその年にイけるんだ』

『すごい未来にはそんながあるんだ』

『でも、この薬は一つ問題があつて、一度飲むともう二回目以降効果が無いんだ』

『えっじゃあ一度タイムスリップしたらもう元の時代には戻れないつてこと？』

『そうなんだ、試しに一日戻つて使つてみたら効果がなかったみたい。』

『あんまり便利じゃないんだ』

『そう、それで発表する前に使用禁止として倉庫に保管したらしいんだ。』

『それで？』

『保管していた薬の一部が流失したらしいんだ。それでその流失した薬の年号は2005年だったんだ。今でいうと去年だね』 『へえー』

『それで流失した薬が裏で回ってある犯罪組織の手に入ったんだ。その犯罪組織はほとんどが指名手配犯でもう逃げ場がなかったんだ。それで捕まるより過去に行った方がいいと判断し、2005年に戻ったんだ。』

『……………』

『過去に行った犯人がいろいろ悪事を働いたら、未来が変わっちゃうわけなんだ。そこで、その薬を開発した一人の』

「東博士」

が責任をとるということで2005年の薬を飲んだんだ。でも』

『でも？』

『どこで間違ったのか、博士が飲んだのは明治後期の1906年。』

『えっ……………』

『唯一不幸中の幸いで薬は飲んでから数時間たないと効かないんだ。だから2005年の薬を持って、泣く泣く1906年に来たんだ』

『……………最低な話ね……………』

やっぱりどの時代にも馬鹿はいるものだ。『あつちなみに1906年は僕がいた年ね。それでこっからが僕の話なんだ』

『いきなり変な人が現れたんだ、とてもびっくりした反面とても嬉しかったんだ』

『なんで？』

『実は僕平凡な日々をおくっていて退屈していたんだ、同じようにダラダラと過ごす日々が嫌いだね。なにか変わったことは起きないかいつも思っていたんだ。』

…やばい！こんな男と同じようなこと考えていたなんて…！所詮私もこの程度？私は軽く落ち込んだ。

『それで博士から今までの話を聞いて変わりに僕がその犯罪者達を捕まえに行くことにしたんだ』

『ふっん、其にしてもアンタ現代に来てても普通に生活してるんだ。』

驚いたりしないの？」

『それはね、博士が使っていたコレをもらって勉強したからね』
そういつて、本を出したみたいだが、私は自転車を運転しているわけで見れるはずがなかった。

『「過去を知る！20世紀後半」21世紀前半book」

つて本でその時代のことを勉強出きるんだ。たぶん犯人達もコレを見て勉強してたと思うよ。』

やっぱり未来はわからない…。

『まあ勉強しても初めは戸惑ったね。最近やつと慣れてきたんだ。まあ犯人達も同じ状況だと思うよ。だから最近になつて活動を始めたんだ。』

『へえ！。つで、春はその【未来の犯罪者】に関わってるかもしれないわけ？』『うん、はつきりとはわからないんだけど、最近この近くで女子高生ばかり行方不明になる事件が多発してるよね』

『それつて、何度が追いつめたけど空を飛んでいったとか、3人の警官を一瞬で殺害したとか…都市伝説的な話は聞いたことあるわ。

となり町でも起きてたような…。まさかこれもその犯罪者が…？』

『そうなんだ、それで僕も最近【未来の犯罪者】の写真を確認してたらそっくりな奴をこの町で見つけてね。』

『……………！！』

第5話：戦い！？

夕方前

結構時間が経過したと思う。矢印の反応が強くなってきたことが何と無くわかった。近付いて来てるのかもしれない。

『もし【未来の犯罪者】がいたらどうするの？』

『うゝん戦わないといけないかなゝ説得して応じるわけないし』

『戦うってアンタ戦えるの？』

『えっ戦うのは、ちはだよ！？』

『…えつゝゝゝ！？なんで私が戦うのよ！？しかもなに当たり前見たいに言ってるの？』 『あれ？当然な』 『ことじゃないわよ！！』
途中で遮った。

『言ってなかったつけ？この未来の道具は作動する瞬間とても強い電波が生じて使用者は気を失うんだゝ。って言ってもそれは過去の人間だけらしいけど』

『？』

『なんか未来の人はその電波に耐えられるような体が出来上がってるんだ。つまり過去の人間は軟弱ってことだよ』

『えっ！？それって私も過去の人間だよね…？』

『あつそつか』

『……………。どっちも戦えないじゃん！』

『うつ、痛いところつくね』

『……こんな馬鹿な人っているんだ……』

『あつ』

いつのまにか町外れの倉庫前にっていた。矢印はこの倉庫を指しているみたいだった。

『たぶんここだね。』

倉庫を前に一気に緊張して来た。もしここに犯人がいたら……。い

やつ！春を助けるんだ！

『とりあえず武器？を渡しとくよ』

『武器？』

『うん。野生動物を捕獲するネットだけだね』

そう言つて野球ボールみたいなものを取り出した。

『とりあえず5個あるからうちが3個で僕2個ね』

『えっ…。これだけ？しかも野生動物を捕獲するネットって……。』

もはや武器じゃない気がするんだけど…。』

『大丈夫！これも未来の道具でね、ボールに小さなボタンがついて
いるだろ、これをね押して作動させてから投げると、何かに触れた
時ネットが出てきてその対象物を捕獲するんだ。それとこれは作
動してから数秒は気絶せずに耐えられるから安心して！』

『（どこに安心をすればいいの？）』

『後一応コレもあるから』

今度は長い棒を出した。

『これは簡単と言うと、電流棒。これで殴れば一発で気絶するよ。
でもこれも作動した瞬間気絶するんだけどね！。』

もう全く意味がない。そこら辺にある棒と何が違うのだ。しかも自
信満々に言われても…。

『…気絶したらどれくらいで意識が戻るの？』 『うん、捕獲用ネ
ットは5分くらいかな？』

『えっ…5分も』

交互に道具を使つても5分は一人で戦わないといけない時があるな
んて…。

『よし！中に入ろっ』

私達は倉庫の重い扉を開けた。

そこは真っ暗で最初は何も見えなかったが、次第に目がなれ見える
ようになった。とても広い倉庫で、周りはシートを被っている物ば
かりだった。

『あつ伊久垣、矢印がアッチの扉を指してるよ』

矢印が一番奥の扉を指していた。

『うん、あそこで間違いないね』

よかった誰もいない。早く春の所に行って早くここを出よう

『オイツ！』

私達が入ってきた方から声が聞こえた。

『お前ら何をしている！』

男の声だった振り返ると一人の男性が立っていた。さっき伊久垣に写真を見せてもらっていた。犯人だ。

『ここは俺の倉庫だ用がないなら出てもらおう』

『ボソツ（ねえ、今は一回逃げた方がいいんじゃない？入口が塞がれてるし、あつちは気付いてないからもう一回様子を見てから）』
私は犯人に聞こえないように、伊久垣に問掛けた。あれっ？

聞こえてない？ってか聞いてない！それどころか伊久垣は、

『お前が未来から来た犯罪者だな！お前を捕まえに来た！』

え〜〜〜！なんでこんなときだけ勇ましいの！？ってかやつぱり馬鹿なの？

『ほう、お前ら一体何者だ？未来を知ってるってことはお前らも未来から来たのか？警察か？それとも馬鹿な研究者達か？』

『いやっ俺は過去から来たんだ！』

別に言わなくてもいいのに…。

『ハア〜？コイツは相当な馬鹿だな！ハッハッハー』

ほら、やつぱり笑われた…。

『まあいい、お前らは死んでもらうぜ！本来なら銃がで殺す所だが、ちようど弾切れでな、これで殺してやるよ！』

男は日本刀らしき物を出し、更に空中に浮いた。

『ねえ、あの人浮いてるんですけど！それにあの日本刀は！？』

『あああれは未来の道具で、あいつの履いてる靴が空を飛べるようにするらしいよ。武器は日本刀みただけど、あれは伸縮自在で、更に鞭みたいになるんだって！危ないから気をつけてね』

『気をつけてねって…。こっちは玉5個に只の棒1本…。……とり

あえず私が最初にボール投げるから気絶してる間絶対守つてよ！』
そして私はボールのボタンを押し作動させた。…押した瞬間、電気が全身に流れたみたいだ。頭がボーっとしてきた、これが気絶前なんだろうか。とりあえず素早くボールを男に向かって投げた。がっ見事に避けられ男の後のパイプに当たりネットが開いた。駄目だ気を失いそう…。

…
…
…
あれっ？全然気を失わない。

『あの全然気絶しないんだけど…』

『本当だ、なんでだろうあっそうか2006年の人間より1906年の人間の方がひ弱なんだ…うわっ危ない』

話ながら相手の攻撃を避けた伊久垣。

つてかひよっとして伊久垣が極端に軟弱なだけではないのだろうか？よくよく見ると、とても細い。そういえばさっき自転車の後にのせていたが、考えてみたらあまり重たくなかった気がする。現に疲れてないし…。やっぱり…。哀れみの目で伊久垣を見た。

『ちは！危ないよ』

『わっ！』

私の前スレスレを刀がかすめた。

『油断してると危ないよ…じゃあ今度は僕が投げるからよろしく』

『えっアンタは使わないで』

遅かった。伊久垣はボタンを押してボールを投げた。しかし軽々と避けられ伊久垣は数秒後気絶した。
なんて迷惑な。

『なんだコイツ！道具の電波にやられたのか？とんだ馬鹿だな！』
男はそう言い笑った。

敵に二度も笑われた伊久垣…。やっぱり馬鹿なんだ。…とそれど

ころじゃない伊久垣を運ばなければ狙われてしまう。私は伊久垣を抱えたがとても軽かった。女の私でも抱ながら走れるほど。

『とりあえず5分逃げなきゃ！』

私はひたすら逃げ回った。とても迷惑な男を抱えて…。

『うゝん』

『あつ起きた？とりあえずアンタさボール使わないで私に渡してよ』
『そりゃ』

…伊久垣は私の話を聞いてないかのようにまたボールを投げた。そしてまた外れ気絶した。……………うわああ、何この男！馬鹿とかのレベルじゃない！

ヤバイどうしようもないアホだ！とりあえずもう邪魔なので電流棒だけを取り、伊久垣は隅っこに投げ捨てた。犯人も伊久垣を無視して私の所に迫ってきた。もう私がやるしかない。

カキン

しかし私の棒は簡単に弾かれた。もう終りだ。私は目を瞑った。
『うわっ！』

…

…

…

…

…

私が目を開けると男はネットに絡まっていた。

『！？』

男の後に伊久垣が立っていた。

『アンタ気絶してたんじゃないの？』

『いやゝボールは投げたけどボタンを押してなくてねゝ作動しなかったんだゝ。』

『えっじゃあ気絶したふりしてたの？』

『まあね。コイツが油断するのを待ってたんだ』

『…じゃあ私はおとり？』

『そだね』

私は落ちていた棒を拾い伊久垣の顔面に投げつけた。

エピソード

1週間後

春は外傷等はなかったが念のため一週間病院で療養していたのだ。

『あゝあようやく退院できた〜』

『まったく！皆がどんなに心配したと思ってるの！』

春を含め行方不明だった女子高生さ全員無事に保護された。未来の道具は見つかりとややこしいので伊久垣が全て回収した。捕まった犯人は『俺は未来から来た』等と言ってまともに事情聴取が出来ないようだ。

『いやあゝ帰る時一人で帰っていたら、たしか男の人とすれちがったまでは覚えてるけど、気づいたらあの倉庫に閉じ込められてたんだよね』

たぶん誘拐するときに、未来の道具を使ったのだろう。

『それにしても、ちはる凄いやね〜！一人で犯人捕まえるなんて』

『たまたまね〜』

『凄いやね〜たまたまやつつけるなんて！』

伊久垣は警察がくる前に姿を消した。また不可思議な事件が多発している。たぶん【未来の犯罪者】がまだ何人かいるみたいだ。それを捕まえるために行った。（一人で捕まえることできるの？）。ちなみに最後まで私のことを【ちはる】と呼んでいた。本当に適当な奴。そういうえばあいつの時代の話を聞いとけばよかったかも。興味が無いと言ったら嘘になる。

いつもどおり春がとなりで喋っている。いつも何かを求めている私だか平凡な日々をおくるとやっぱりこれが一番なのかもしれないと思うのである。

春が数歩先にでる

『あつ！人が倒れてるー！』

く
終
わ
り
く

『……………えっく！？』

エピソード（後書き）

えっと初めて小説というものに挑戦してみました。無茶苦茶だったので酷い作品になったと思います 見てくれた方本当にありがとうございます（――） m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4953a/>

未来?過去!?

2010年10月10日04時33分発行